

共に未来を育てるために

# 進路指導の現場から

第7回

低学年時から  
勤労観・就労観を育成

——進路指導の方針について、  
教えてください。

本校は1学年10クラス400名規模の普通高校です。4年制大学の進学率は約8割。その他の生徒は短大や、主に医療系の専門学校に進学します。

進路指導部が掲げる目標は、「生

徒一人ひとりの希望進路を実現させること」。それに加えて昨今は、「社会人として生きていくうえで、勤労観、就労観の育成」に力を入れています。将来の働き方を自分なりに明確にしたうえで、大学での学びに目を向け、進学先を選んでほしいと考えるからです。

う講演会を実施しています。ビジネスマンをはじめ公務員、教員、保育士、パティシエなど、さまざまな職種の卒業生を招き、仕事の内容ややりがいについて話してもらいます。職業への理解を深めることはもちろん、「どんな仕事でも、社会的責任があること」を知ってもらいたいのが狙いです。

次のステップとして、2年次にオープンキャンパスに参加させます。各大学の特徴を知るといっても、「学部・学科で学ぶ内容を深く理解する」のが目的です。

というのも、最近では学部・学科の名称が多様化していて、「マスメディアの仕事に就きたいから、メディア○○学部を志望する」といったように、名前のイメージだけで志望を決めてしまう生徒も見られるからです。しかし、重要なのは名称ではなく、学びの内容です。「希望の職業に就くには、どういったルートがあるのか」「大学で何を学んでおくべきなのか」を、早い時期から考えさせることが大切です。

地元志向が強い一方で  
海外に目を向ける生徒も

——進学実績を見ると、九州工  
リアの大学への進学者が非常に



福岡県立筑紫中央高校 進路指導主事

## 前田 勝範

まえだかつのり ●教員歴25年。専門教科は国語。2016年度より進路指導主事。指導にあたる際のモットーは「一生懸命頑張っている普通の生徒が自己実現できる環境をつくってあげること」。

多いようです。生徒の地元志向は強まっているのでしょうか。

本校の場合、地元大学への進学率の高さが、生徒や保護者に評価されている面があります。そのため、「地元で進学したい」という希望を持つ生徒が多く入学してきました。ただ、それを差し引いても、年々、地元志向が強くなっているように感じます。

もちろん九州エリアの大学でも、学べる学問分野は充実しています。しかし、いろいろな地域から学生が集ってくる首都圏の大学のほうが、さまざまな面で刺激を受け、成長につながることもあるでしょう。九州エリア以外の大学にも目を向けるよう、教員側から

も面談時に、アドバイスを与えたりしています。

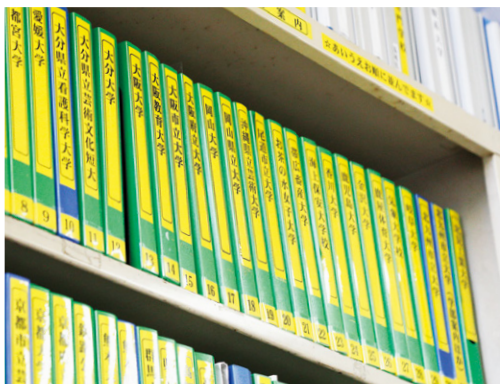
また、生徒に刺激を与えるという意味で、今年から全学年を対象とした海外派遣事業もスタートしました。アメリカ東海岸（ニューヨーク、ワシントン）へ10人の生徒を10日間派遣し、現地の大学を見学させる予定です。参加者は面接、小論文、英語力で選抜し、費用の一部は高校が補助します。今年40人の希望者が出ました。

——内向きな生徒がいる一方で、海外に目を向ける生徒も増えているということでしょうか。

前年、本校から2人、アメリカとカナダの大学に進学しました。もともと海外志向の強い家庭の生徒でしたが、グローバル化が進む中、本人たちも英語が話せること、異文化を体験しておくことの重要性を実感したうえでのことではないでしょうか。

——進路選択における保護者の関わり方に、変化を感じますか。

保護者の意見の影響が強くなる一方で、「子どもの将来なのだから、本人の言う通りにさせてあげたい」という方も増えていると思います。ただし、



すべてを生徒任せにしてしまうと、早期に受験科目を絞ってしまったり、早く進学先を決めたいがために推薦入試に逃げてしまったり、成績に悩み大学進学を諦めたりする生徒も出てきます。本校では年に1度、保護者向けの進路説明会を開き、「キャリア教育は生徒たちが社会で生きていくために必要な力をつけさせるためのもの。保護者も協力してほしい」と伝えています。

2020年度に向け  
授業の再構築が進行中

——大学入試が大きく変わる  
2020年度に向けて、指導を変  
えている部分はありますか。  
単純な知識のアウトプットでは

### まとめ

地元志向が高まる一方で  
海外大進学を  
視野に入れる生徒も

高校では入試改革に  
対応する授業を  
すでに開始している

### 高校訪問 ワンポイントアドバイス

#### APで求める学生像を 具体的に説明してほしい

高校訪問の際、大学の方に説明していただきたいのは、「具体的にどのような学生を求めているか」です。もちろん、アドミッションポリシーは気にして読んでいますが、抽象的で内容がわかりづらいと感じます。「総合的な学習の時間」でも、AP研究の時間をつくりたいと思っています。ですから、APを具体的にかみ砕いて説明してもらえるとうれしいですね。

●福岡県立筑紫中央高校 ▶1917年、筑紫実業女学校として開校。2017年の100周年を機に、ICTの導入、海外派遣の実施など、新たな取り組みに着手 ▶2017年度卒業生の合格実績は国立大学41名合格（現役のみ）、私立大学の主な進学先は、西南学院大学、福岡大学、同志社大学、立命館大学、関西大学、関西学院大学など。





グローバルゾーン内の LOFT では3種類の学習方法を体験できる。“Visits”はチューターとの英会話やアクティビティを経験し、“Tasks”はオリジナルのワークシートに取り組む。“Events”の多くはチューターやアシスタントによるプレゼンテーション。盆栽に詳しい甲南大生によるハンズオンセッション。

一歩先を行く大学に聞きました！



## 甲南大学

●甲南大学 ▶1919年学園創立。1951年大学設立 ▶8学部14学科。学生数は約9000人 ▶建学の理念に基づき、開学以来、人物重視の教育を行う ▶THE世界大学ランキング日本版2017総合順位111・120位



学長補佐・国際言語文化センター教授

## 伊庭 緑

いばみどり ●神戸大学大学院国際文化学研究科博士後期課程修了。学術博士（神戸大学）。2002年ロンドン大学客員研究員。現在甲南大学学長補佐・国際言語文化センター教授。華道真生流正教授。専門は英語教育、英語音声教育。留学生に生け花も教えている。

## 学内外のリソースを「融合」させて 全学生にグローバル教育を提供

特定学部にとどまらない  
グローバル教育を展開

——貴学が推進するグローバル教育について教えてください。

本学は、創設者・平生鈺三郎<sup>ひらおはつさぶろう</sup>が掲げた建学の精神「世界に通用する人物たれ」に基づき、100年近く前からグローバル人材の育成に取り組んできました。しかし、現在まで国際系学部をあえて置いてはいません。これは、学部を問わず、全ての学生にグローバル教育

が必要であるとの考えのもとで育が必要であるとの考えのもとです。

本学のグローバル教育のキーワードは「融合」です。日本人学生と留学生の融合という意味もありますが、留学をサポートする国際交流センター、全学の外国語教育を担当する国際言語文化センターに加え、学部を横断したプログラムの策定を行う共通教育センターの3つが「融合」して、全学生がグローバル教育を受けられる体制を整えています。

段階的なプログラムで  
学生の留学を促進

——具体的な取り組みについて、教えてください。

国際交流センターは、「ホップ・ステップ・ジャンプ」の3段階で留学までの道をサポートする「段階的国際力養成プログラム」を通じて、学生の留学を促しています。ホップでは、まず学内で国際交流できるプログラムを提供します。日本人学生が留学生の生活を

によっては卒業必要単位として認めています。段階的に「国際力」をアップさせ、最後に長期海外留学へとジャンプしてくれることを期待しています。

また、学内国際交流ホップの核として、岡本キャンパスにグローバルゾーン「Porte（ポルト）」を開設しました。ここには目的に応じて3つのエリアがあります。

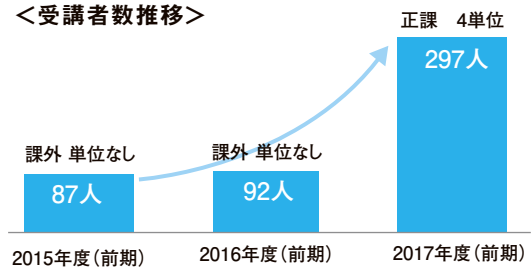
「あじさいのーむ」は、留学生の支援および、日本人学生と留学生の交流スペースです。「KONAN Language LOFT」は、英語のみでコミュニケーションするエリア。国際言語文化センターの教員やチューター（留学生が担

当、アシスタント（留学経験のある本学学生）が、ワークショップやアクティビティを毎日開催しています。3つ目の「グローバルラーニングコモンズ」には、使用言語の制限がなく、「英語を話すことに抵抗はあるが、異文化の空気に触れてみたい」という学生が集まれるスペースとなっています。

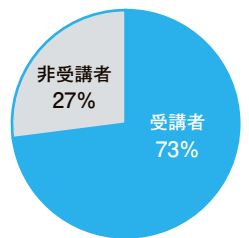
この場所を一部の学生のみが使用するのでは意味がありません。そこで、1年次の必修の英語授業に紐付け、成績評価に反映させています。グローバルゾーンで開催されるイベントに参加して10ポイント貯めると、成績の10%に評価されるしくみです。

### グローバル・コミュニケーションIの受講者数推移

＜受講者数推移＞



2017年度の受講率  
※経営学部2年生



英語のクラスは、入学時に受検するGTECの成績に基づいてレベル別に18クラスを編成しています。1クラス15人程度の少人数授業で、ベルリッツのネイティブ講師によるオールイングリッシュのコミュニケーションな内容です。

正課のキャリア科目にも  
英語学習の授業を導入

——語学教育についての取り組みを教えてください。

以前、外国語科目は1、2年次に受講するものでした。今はその状況を改め、4年間で段階的に語学力を上げられるカリキュラムに刷新しました。コミュニケーション系の科目も増やしています。国際言語文化センターでは、理系学生向けの英語など、各学部の専門的なニーズを満たす科目もつくっています。

また、本学には「キャリア創生共通科目」という、会計やITなど、キャリア教育につながる実学的な科目群があります。これは1～4年までの全学生が選択できる正課科目です。どの学部の学生も英語を使う仕事に就く可能性が将来あると考え、本年度からここにビジネス英語を扱う「グローバル・コミュニケーションI」という授業を開設しました。

英語のクラスは、入学時に受検するGTECの成績に基づいてレベル別に18クラスを編成しています。1クラス15人程度の少人数授業で、ベルリッツのネイティブ講師によるオールイングリッシュのコミュニケーションな内容です。

——授業を外部講師に委託したのはなぜでしょう？

語学教育においては少人数授業が有効です。本学には英語の専任教員が6人、特任は4人います。非常勤講師も多数お願いしていますが、今回週2コマ連続開講の18クラスを増設したので、外部の手を借りられる部分は、アウトソーシングすることにしました。

とはいえ、外部に丸投げしてしまうわけにはいきません。授業は定期的に見学し、難易度の設定や扱うトピックの内容に改善の必要性を感じた場合、関係者が集まって話し合い、後日、改善されたかを確認しています。また、既存のビジネス英語授業との差別化など、調整が必要な面はありますね。

——今後に向けた課題と展望をお聞かせください。

本年度から全学でスタートした授業なので、数値的な成果はまだ出ていませんが、受講者の評判はおおむねよいようです。ただ、この授業はもともと経営学部のプログラムを全学部対象の正課授業に発展させたもの。本年度の受講者はほとんどが経営学部の学生になっているので、今後は他学部の受講者を増やし、より全学的な展開につながるしくみを考えたいと思います。

※本連載は今号にて一旦終了いたします。ご愛読ありがとうございました。

取材・文／本間学 撮影／岸隆子





**かどわき・ひろふみ**●1950年生まれ。1978年慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程修了。1981年東北大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得。1983年大東文化大学文学部中国文学科専任講師、助教授を経て、2000年教授。文学部長、学園評議員・理事、大学院文学研究科委員長を歴任し、2017年より現職。博士（文学）。

のもとに43のプロジェクトを発足させ、数値目標を掲げることで実効性を高めています。最も力を入れているのが教育改革です。特に初年次教育では、大東生らしい倫理意識や国際性を高めること、学生の主体性を引き出すことの2点をめざしています。

前者については、例えば「論語」や「書道」など本学の核となるような科目や英語科目などを、全学生が必ず履修するようなくみを整備し、「大東文化大学独自の基礎学力」を養います。

後者については「大東文化を元気にする学生リーダー育成プログラム」を前年度から展開し、取り組んでいます。これは、入学式など、さまざまな学内イベントを学生主導で運営するためのリーダーを育成するプログラムです。前年度は約100名の学生が参加し、本年度は、倍の約200名の学生が参加する予定です。

本学の学生には、倫理意識は高いが、ややおとなしいという特徴がみられます。しかし、こちらからさまざまな仕掛けをしていくことで、学生が本来持っている主体性を引き出すことは可能です。こうした正課外での取り組みは、「Daito Education Plus」として体系化していきます。

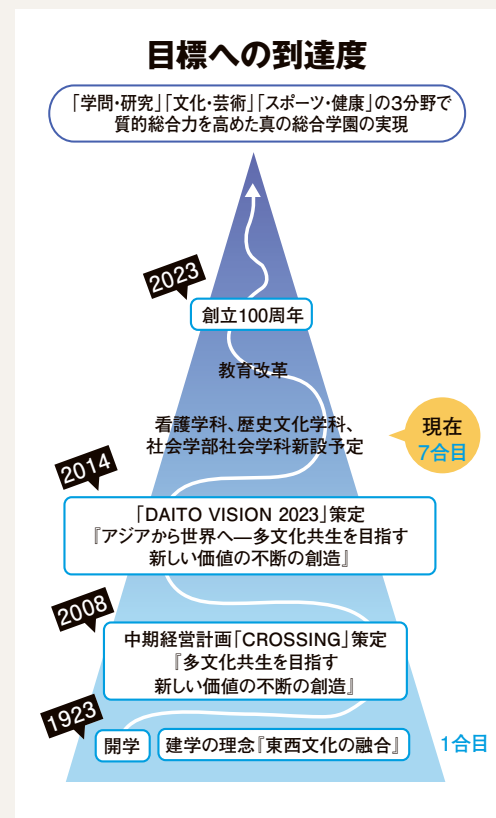
**スポーツ振興による大学の活性化**

スポーツの振興は、本学の大きな特長の一つです。大学スポーツには、知名度を高めるための広報活動という面もありますが、最も重要な意義は、スポーツに取り組む運動部の学生とそれを応援する在学生それぞれに対しての教育効果です。現在、スポーツ強化では、41のクラブの活動を「スポーツ振興センター」が中心となってサポートしています。今後は、在学生にとって大学のスポーツがより身近な存在となるように、ファンクラブを作ることにも企画しています。多くの学生をスポーツに巻き込むことで、大学を活気づけたいと考えています。

学生一人ひとりの主体性を引き出し、スポーツ振興などを通じて大学の活性化に取り組むことの先に、学生が中心となる大学づくりの将来像を見えています。

**3つの学科新設と4年間一貫教育の実現**

2018年度4月には、3つの新学科が誕生します。スポーツ・健康科学部に「看護学科」（設置認可申請中）、文学部に「歴史文



化学科」（届出済）を設置し、環境創造学部環境創造学科を「社会学部社会学科」（届出済）に改組します。

看護学科では、豊かな人間性と幅広い教養を備えた看護師育成を行い、高齢化社会における地域医療の担い手としても活躍できる人材を養成します。歴史文化学科は、本学の原点とも言える教育研究を継承していく学科です。社会学部社会学科は、地域社会や国際社会の諸問題を調査・分析できる人材を育成する学科として発展させていくことを考えています。

本学の板橋・東松山両キャンパス周辺の地域では、高齢化が進んでいます。看護学科の新設は、そうした地域の課題に大学として向き合うことでもあるのです。さら

に東松山キャンパスでは、スポーツ・健康科学部を中心に、健康をキーワードとした地域との連携が考えられます。このように地域に根差した大学づくりに取り組むことも、今後、本学がめざす方向の一つです。

初年次教育と専門教育との関わりを深め、大東文化らしい4年間一貫教育の実現化も図っていきます。そのためには、現在、学年によってキャンパスが異なる状況を解消する必要があります。板橋と東松山の両キャンパスについて、それぞれ充実を図りつつ、どの学部の学生も同じキャンパスで4年間学べるような学習環境の整備を進めます。

「教育の大東」の実現に向けて、今後も改革を推進していきます。



荒波に挑むトップ

**私の改革論**

No.20

取材・文／仲谷宏 撮影／坂井公秋

することも一つの解決策ではありませんが、国内の大学進学率を高める努力も怠るべきではありません。

ここで鍵を握るのが、高大接続改革です。高校教育と大学教育の間に横たわる溝を埋める、小学校から大学まで連続性のある教育システムを構築することが、大学進学率の向上に一定の役割を果たすでしょう。高大接続改革が進み、それぞれがオンリーワンの大学として、その教育にふさわしい学生をスムーズに接続させるシステムを構築する必要があると考えています。

## 初年次教育を重視し学生の主体性を培う

本学は、儒教をベースにした教育による東西文化の融合を、建学の精神として掲げています。日本に軸足を置きつつ、西洋の文化を取り入れることは一種の国際性の養成であり、日本の伝統を理解したうえで、グローバルな考え方を備えた人材を育成することは、本学の役目だと自負しています。

こうした姿勢をより明確にするため、2023年の創立100周年に向けた施策を、「DAITO VISION 2023」としてまとめました。6つのヴィジョン

## 建学の精神に基づいて独自の教育改革を

人口減少社会に突入した日本で、高等教育がさらなる発展を遂げるには、大学の独自性を高める改革と、大学進学率を高める改革の両方が必要となるでしょう。私立大学はそれぞれ出自が異なり、独自の「建学の精神」を持っています。そのため、国立大学と私立大学では、大学改革においてめざす方向が異なります。加えて、自己点検・評価や認証評価が導入されたことで、各大学は、これまで以上に自らがどのような大学であるかを再認識せざるを得なくなっています。私立大学は、建学

# 創立100周年に向けた改革で「教育の大東」の実現をめざす

初年次教育改革で大東生らしさと主体性を高める

大東文化大学●1923年前身となる大東文化学院設立▶8学部18学科。学生数は約1万2000人▶THE世界大学ランキング日本版2017教育満足度111-120位、教育成果131-140位、国際性141-150位